

描画の発達とメディア接触

子安増生・郷式 徹

1. 目的

描画は、言葉の発達途上にある乳児期から幼児期の子どもたちの表現の媒体としてきわめて重要な意味を持つものであると同時に、身の回りの素材によって誰でもおこなうことができる簡便な発達検査法でもある（コックス著、子安訳『子どもの絵と心の発達』有斐閣）。本調査では、なぐりがきから表象的描画にうつる2歳児の描画を収集し、その発達過程と、テレビ・ビデオ・ゲームの各メディアとの接触量との関連性について分析した。

2. 方法

対象者：1103組の親子から回答を得た。保育施設利用の有無で2群に分けられた。

調査内容：子ども自身に油性のペンで画用紙に自由に絵を描いてもらい、描き終わった後に何を描いたのかを保護者がたずねて記入した。保護者には、用紙の裏記載の①描画の開始時期、②一日の描画時間、③子どもの描画についての質問10項目（表象的描画度、母子コミュニケーション度、学習体験度に分類された）についても回答してもらった。

3. 分析

(1) 保育施設利用の有無によって、描画の開始時期と一日の描画時間に有意差はない(表1, 表2; n.s.)。

表1. 保育施設利用の有無別の描画の開始に対する認識(人)

	保育施設利用	
	有り	なし
絵を描き始めた時期がわかる	114	344
絵は描いているが、開始時期はわからない	121	457
まだ絵を描いていない	5	16

(2) 保護者への質問間の相関をみると、表象的描画度と母子コミュニケーション度との間に正の相関がみられた。

表2. 保育施設利用の有無別の描画時間

	保育施設利用	
	有り	なし
平均描画時間	22.95	25.17
(SD)	(19.27)	(28.95)
人数	n=233	n=802

(3) 描画内容を2名の研究者が評定・分類した。残差分析の結果、保育施設利用「有り」群では円錯画様の「未分化ななぐりがき2」が多いが「表象画」は少なく、「なし群」では「未分化ななぐりがき2」が少ないが「表象画」が多いという傾向が見られ、保育施設利用の有無によって描画内容の質が異なることが示された(表3; $p < .01$)。

表3. 保育施設利用の有無別の描画内容の人数分布(人)

内容	保育施設利用	
	有り	なし
未分化ななぐりがき1	11 (1.8)	20 (-1.8)
未分化ななぐりがき2	121 (2.5*)	343 (-2.5*)
分化した図形	55 (-1.6)	233 (1.6)
擬似表象画	30 (-0.8)	120 (0.8)
表象画	17 (-1.9*)	93 (1.9*)

未分化ななぐりがき1と2では、1のほうがより未分化である

()内の数値は調整済み残差

*は5%水準で有意、+は10%水準で有意傾向であることを示す

(4) 描画内容とメディア接触量との関連性の分析では、ビデオ接触のみ、特に保育施設利用あり群のビデオ専念視聴と負の相関が示された。

4. 結論

2歳の時点での描画活動は、子どもの個人的な表象活動というよりは、保護者と協働して行う遊びの一環という母子コミュニケーション的な側面が強く、ビデオ視聴はその活動を妨げる可能性が少なくない。